

『ドンビー父子』における old fashion の意味

近 藤 浩

序

『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-8) というタイトルは、ロンドンの豪商ドンビー氏 (Mr. Paul Dombey) が経営する商社の名称でもある。この商社はドンビー氏の父親が一代で築きあげたもので、父親の存命中に、ドンビー氏はその共同経営者となった。そして彼は、父親の遺志を継ぎ、過去ほぼ20年間、唯一の経営者として、また新興中産階級に属する大商人として、自社の維持・発展に尽力してきた。そして48歳となった今、待ちに待った跡継ぎ息子ポール (Paul Dombey) が誕生する。彼はその喜びを次のように言い表す。「妻よ、この商会は今一度……名実共にドンビー・アンド・サンとなるのだ。ドン、ビー、アンド、サンに！」(1) そして彼は息子の命名に際して、「この子の親父の名だ、妻よ、この子の爺さまの名でもある！ この子の爺さまが今日という日に生きていてくれたらどんなに良かったことか！」(2) と言う。これらの言葉を聞いただけでも、これまでドンビー氏が商社のために耐えてきた重責と心労がわかる。家族経営であるがゆえに、跡継ぎ息子の獲得は必須なのである。

当然のことながら、ドンビー氏は、ポールに大きな期待をかける。ド

ンビー氏は、息子誕生の場面で、「この若き紳士は運命をまっとうしなければならぬ。運命だぞ、小さな同志 (little fellow) よ」(4) と言う。父親によって、ポールは赤ん坊の頃から大人として扱われ、商社名のサン (Son) になるべく、細心の注意を払って育てられることになるのである。

しかし、5歳になったポールは、周囲の期待に反し、元気な男の子には成長していない。小さな顔には「病弱で物足りなそうなところ」(91)が見える。そして、この子どもの性格や行動が説明される際には、周囲にいる登場人物から、あるいは作者チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) から、old-fashioned という形容詞を用いられるようになるのである。(この子どもに対して、初めてこの語が用いられるのは第8章である。)そして、ポールは、その語の意味がわからず、それについて真剣に考えるようになる。「その old fashion って何のことだろう。それがみんなを嘆かせるらしい！」(193) こうした思いから、ポールが old fashion という語にネガティブな印象を持っていることがうかがわれる。この子どもは、父の跡継ぎとして、あるいは、生まれた時代を生き抜く者として、自分が不適格と思っているのである。

『ドンビー』の舞台は1840年代のイギリスである。それは、ドンビー氏の姉ルーイーザ・チック (Louisa Chick) の言葉にあるように、「変化の世の中」(410)である。物語の中では、変化・進歩の象徴として、鉄道建設の様子が描かれている。アンガス・ウィルソンは、これを「新しい北部鉄道 (the new northern line)」だと言う (Wilson, 169)。リチャード・D・オールティックによれば、1830年から1848年の間に5千マイルを超える鉄道が敷設されたとのことである (Altick, 75)。鉄道は産業をさらに発展させ、人々の暮らしを変える。生活が変化すれば考え方も変わる。そんな世の中にドンビー氏やポールは生きているのだ。

このような時代にあって、先ほど引用したポールの問いは発せられて

いる。ポールは6歳ほどでこの世を去るが、最後まで上の問いに対する明確な答えを得ることはない。また、ディケンズも読者に対し、それを与えていない。そこで、本論では、先のポールの問いに対する答えを探ってみたいと思う。そして、可能であれば、その答えを、物語の描かれた1840年代のイギリス社会と結びつけてみたい。

1

ポールは *old fashion* にネガティブな印象を感じているのだから、この語は彼にとって「時代遅れ」「古いやり方」といった意味を持っている。では、時代にそぐわない古いものとは何であろうか。5歳になったポールの描写を見てみよう。

彼は、子どもっぽくはしゃぐこともあったし、気難しい性質というわけではなかった。しかし、この子には、自分用のミニチュアの肘掛け椅子に座って物思いにふけるという、奇妙で *old-fashioned* で内省的なところもあった。そんなとき、この子は、おとぎ話に出てくる小さな恐ろしい存在の一つのように見えた（し、そんなふうな話し方もした）……。(91)

上の引用中では、考え込むという行為に *old-fashioned* という修飾語が付けられている点に注意しなければならない。幼くして、ポールの頭の中には、育児室で読み聞かされたであろうおとぎ話に潜む不思議から金銭の有益性に至るまで、さまざまな考え事がある。答えを求めて想像力を駆り立てること、答えについてあれこれ思いめぐらすことが、時代にそぐわないということになる。実際、ポールが子どもらしい問いを発する

と、彼の評価は下がってしまう。6歳前後でポールは、ブリンバー博士 (Dr. Blimber) の寄宿学校で紳士教育 (主に古典の学習) を受けることになるが、在学中にその学校のホールにある時計を修理しにきた職人を質問攻めにする場面がある。その質問は、たとえば、人が亡くなったときには鐘はどのように鳴らされるのか、それは結婚式のときのものとはどのように違うのか、残された人々にだけ憂鬱に聞こえるだけなのかといった内容のものである。あれこれと不思議がる少年に対し、時計職人は「old-fashioned」(193) というレッテルを貼りつけるのである。これはポールのような好奇心を持つ子どもが、いまどき珍しいということを示している。

前の段落で触れたように、ポールの幼い思考は金銭の有益性にも向けられる。第8章に、暖炉の前に座っているポールが、隣に座っている父親ドンビー氏に「パパ! お金って何?」(92) という素朴な問いを投げかける場面がある。適切な答えを返せない父親に、ポールは続けて金にできないことは何かと尋ねる。父親は「ポール、お金は何でもできるのだよ。」(92) と答え、以下の引用へと続く。

「何でもできるの、パパ?」

「ああ、何でも、ほとんど何でもだ」とドンビー氏は言った。

「何でもって全部ってことだね、パパ?」と息子は尋ねたが、ほとんどという制限には気づかなかったか、おそらく理解していなかった。

「何でもの中には全部が含まれる。そうだよ」とドンビー氏は言った。

「なぜお金はママを救ってくれなかったの?」と子どもは言い返した。「お金って冷たい奴なんだね。」(93)

ポールは、父親に金銭の根本的な価値を尋ねている。おそらく、これま

で何度も沈思黙考してきた問いに違いない。「ほとんど」という曖昧さを意味する副詞を取り払い、真に金が人の支えとなれるのかと、この子どもは尋ねているのである。一方、ドンビー氏はこの時まで金とは何かと考えたことがない。彼にとって金は力以外の何ものでもないからだ。彼は内心、息子からの問いに憤慨する。大人にとって疑うべくもないものの価値を問うということ、これは紛れもなく子どものイノセンスのなせる業である。

このように考えてくると、old fashionの意味するものの一面が見えてくる。それは、子どもらしい考えを維持すること、また、ポールが好奇心を持つ内容から判断して、血の通う人間への関心を持ち続けることである。

となれば、ポールの心配にもかかわらず、人間関係に重きを置く場合、old fashionは肯定的な意味を持つことになる。この点を確認しておこう。

ポールはブリンパー博士の娘コーネリア (Cornelia Blimber) から、夏休み前に、次のような評価「P. ドンビーの性格分析」(183)を伝えられる。

「……この若き紳士について遺憾に思われるべきことは、彼が性格と行動において風変わり(たいてい old-fashioned という用語で表される)であることである。また、性格および行動のいずれにおいても明確に非難を必要とする点は見られないものの、同じ年頃で同じ社会的地位にある他の若き紳士諸君の様子とは異なることが多いことも残念というべきである。」(184)

コーネリアは上の評価について、こう言い添える。「これは当然私たちにとっても痛ましいことです。というのもね、ドンビー君、そうなればいいと思えるほどには、私たちはあなたのことが好きになれないから

なのです。」(185)この言葉がポールの気にかかる。そしてこの子どもは、夏休みで自宅に帰る前に、皆から好かれるように努力していく。同窓生の手伝いをしたり、プリンパー博士を始めとする教師たちとも積極的に交わったりすることによってである。そうした行為によって、皆がポールは「old-fashioned」(186)であることを確信することになるのだが、それでもこの子どもは誰からも愛されるようになる。そして学校を去る晩には、コーネリアからも次のように言われる。「ドンビー君、ドンビー君、あなたはいつだって私のお気に入りの生徒だったわ。」(203)ポールの人とのかかわりが生んだ結果である。ポール自身や同窓生らのネガティブな印象にもかかわらず、old fashion は、人々を結びつけるものとして、ディケンズから重視されていることは確実である。

2

ポールにとってネガティブな意味に感じられた old fashion は、父親であるドンビー氏にとって、どのような意味を持つことになるのだろうか。この点を考察するために、まず、ドンビー氏がポールのために乳母を採用する場面に注目してみる。

妻を失い、緊急に赤ん坊のポールに乳母をつける必要に迫られたドンビー氏は、労働者階級のポリー・トゥードル (Polly Toodle) を採用する。その際、ドンビー氏は、契約の条件として、次のようにポリーに言う。

「お前には自分の子どもたちがいる」とドンビー氏は言った。「お前が私の子どもに愛着を感じる必要があるとか、私の子どもがお前に愛着を持つ必要があるとかいうことは、この契約にはまったく含まれない。その種類のもものは期待もしていなければ欲してもいない。その逆

を望む。おまえがここを出て行くとき、単なる売買契約、貸し借りの問題としてすべてを打ち切ることとし、以後は近づかないでくれたまえ。あの子はおまえを思い出すことをやめるし、お前にもあの子を思い出すのを止めてもらいたい。」(16)

上の引用を見ると、ドンビー氏にとって、人間の情愛などはすべて無用の長物であるかのように思えてくるが、実はそうではない。ドンビー氏自身にも彼なりの愛情があるからである。ただそれは、息子ポールにのみ向けられており、それ以外の方向には向かわない。ドンビー氏にとって、ポールは「自分の偉大さの一部、あるいは（同じことだが）ドンビー・アンド・サン」の偉大さの一部」(90)であり、商社を継ぐ者として「常に彼と意思疎通し、彼の考えを知る男」(91)に育たなければならぬ存在である。そして、ポールが意思疎通を図る相手は父親だけに限定される必要がある、とドンビー氏は考えている。なぜなら、彼が「私は私たち二人の間に人が踏み込むことを望まない。」(46)と述べているからだ。そして彼は、息子を共同経営者に育てあげた暁には、息子と富、企画、権力を共有し、二人して「黄金の二重扉」(280)で世間のすべてを締め出すことを考えているのだ。それゆえ、息子が自分以外の人間に敬意や情愛を抱くことは、ドンビー氏にとって避けねばならない事態である。実際、ポールが6歳年上の姉フロレンス(Florence Dombey)への思慕を深めるにつれ、ドンビー氏はその娘をポールとの関係におけるライバルとさえ見るようになる。他の誰かと old-fashioned な人間関係を築くことは、彼の計画遂行の、またポールの成長の妨げとなるのである。

このように見てくると、ドンビー氏がポールをどうしたいのかがわかってくる。この父親は息子を、自分と同じ考えを持つ男、以心伝心が成り立つ息子、さらに踏み込んで言えば、自分の分身にしたいのである。

なぜドンビー氏はそうする必要があるのでろうか。「彼は、彼の父親が彼に先んじてしたように、身を起こし、生と死の過程を経て、Son から Dombey になった……」(2) のであるから、父親のやり方を模倣して いると考えられる。それを感じさせるのが、次の引用である。乳母のポリーが、ドンビー氏の命令に従い、彼が自分の部屋から様子を見ること ができるように、赤ん坊のポールを抱いて歩いている場面である。

彼女が、こうした機会に、距離を置いた暗い場所に腰掛け、黒っぽく 見える重々しい家具類——この館は彼の父親が長年住んでいたもの で、館の家具類の多くは、old-fashioned で厳めしかった——の合間か ら、赤ん坊を見つめているドンビー氏をちらりちらりと見るにつけ、 彼女は、彼はまるで独房にいる孤独な囚人か、あるいは近づいて声を かけられたり理解されたりすることのない奇妙な亡霊であるかのよう に、孤独なお方なのだわ、と考えるようになりだした。(22-3)

父親が当主であった時代の館の様子が、それから20年ほど経過した今 でも、変更を加えられずに維持されている。上の引用中における old-fashioned の意味は「前の時代の」あるいは「旧式の」である。old では なく old-fashioned が用いられているところに、前当主の影響が色濃く残 っていることが感じられる。ドンビー氏の部屋はかつての父親の部屋で あったに違いない。そして、その室内で前当主の息子（2代目ドンビー 氏）が囚人のような様子をしていると描かれている。上の引用から、ド ンビー氏は父親の方針に倣い、且つ、それに束縛されていると見てよい。

つまり、ドンビー氏は、商社を維持・発展させ、それによって自分の 偉大さを保つためには、父親の方法を模倣する必要があると思っている のだ。それは、後継者の育成方針においても同じである。ヴィクトリア 時代の格言に「子どもは姿が見えていればよいのであって、子どもの言

うことを聞く必要はない」(Little children should be seen and not heard.) というものがある (Briggs, 13)。ドンビー氏も子どもの頃に、この時代の慣例として、父親の意思への服従を要求され、2代目当主となった今でも、そうすることが正しいと信じているのである。

ただ、もしかすると、ドンビー氏は彼の父親の方針に依存せざるをえないのかもしれない。『ドンビー』の書かれた1846年から1848年を現在とすれば、初代ドンビーが起業したのは18世紀の終わりか19世紀の初めあたりだろう。産業革命後、発展を続けるイギリス社会において、新興中産階級の仲間入りを果たしていく人々は、成功するために信念と活力を持って仕事に専念したはずである。事業の初代経営者として、誰の指図に従うわけでもなく、思うままに行動することもできたはずだ。そして、ある程度事業が成功し安定した段階で、跡継ぎの人間にバトンを渡す。しかし、軌道に乗った段階で引継ぎを受けた者たちは、繁栄を維持するために、冒険する必要がない。目の前に成功の実例があり、しかも厳格な父親が先例に従うことを要求する。

ここまで見てくると、old fashion という語に込められたもう一つの意味を知ることができる。仮にドンビー氏がこの語の定義を行うとすれば、前の世代から受け継がれるべき行動方針や習慣ということになり、しかもポジティブな意味合いを持つことになる。しかしながら、ドンビー氏の先代に倣った養育方針は、ポールを不幸な子どもにしてしまい、その死期を早める原因にもなる。またドンビー氏は、女の子をドンビー家及びその事業に役立たぬ「たんなる粗悪貨幣の1枚」(3)とみなし、娘フロレンスに関心を示そうとしない。これらを考慮すると、この父親にとっての old fashion の定義は、ディケンズにとってはネガティブなものと言わざるをえない。

3

ディケンズは *old fashion* という語に二つの意味を込めたことになる。一つは、人間どうしの触れ合いやお互いへの関心を維持するという態度、そしてもう一つは、先代から受け継がれる事業家としての冷徹な心得である。どちらも必要であろうが、ドンビー氏の場合がそうであるように、後者が力を増しすぎれば、それは罪悪となる。事業を維持、発展させるために後者を優先させるとしても、前者を忘れてはならない。情愛を重んじるディケンズであれば、そんなメッセージを伝えようとするに違いない。以下、その点を作品の中に探してみたい。

商会の経営において、ドンビー氏は「彼の右腕」(375) と呼ばれる支配人ジェイムズ・カーカー (James Carker) の助力を必要としている。彼は、ドンビー氏から商会の実質的な経営を任されている。彼は、いずれは商会の共同経営者になりたいという野心を抱いている。これは、ポールが亡くなった直後に、次のような説明があることから明らかだ。「……カーカー氏の進路から何かがなくなり——何かの障害物が取り除かれ——その結果彼の進む道がきれいに整えられるようだった。」(240) そして彼は危険な男でもある。彼は「可能ならば、自分を征服した権力と戦うであろう男」(172) のようだと言明される。ドンビー氏は、雇い主という強力な立場を利用して、カーカーを自分の手足として容赦なく使う。カーカーは元来、野心的で好戦的な男であるから、雇い主の自分に対する扱いに関する恨みも、それだけ大きくなる。次の引用は、カーカーが積年の思いを兄ジョン (John Carker) に向かって、吐き出したものである。

「私自身から一番低い地位の者に至るまで、ここで雇われている人間の中には、自分の主人が卑しめられるのを見て心底喜ばない者は一人

もいない。密かに主人を憎まない者、そして、もし自分に権力と大胆さがあれば、主人に立ち向かわない者は、ここの従業員の中に一人もいないのだ。主人に気に入られるようになればなるほど、ますます主人の傲慢さを目の当たりにするのだ。主人に近づけば近づくほど、主人からの距離は遠くなるのだ。」(643)

ドンビー氏が二人目の妻イーディス (Edith Dombey) を迎えた時点で、カーカーはドンビーがポールに代わる跡継ぎの誕生を期待していることに気づいたのであろう。目論見の潰えたカーカーは、ドンビー氏への復讐を実行する。商会を危険にさらす投資を行い、イーディスとの駆け落ちに至るのである。

カーカーの反逆は、抑えられる可能性があったのではないだろうか。たとえ商売上、生き馬の目を抜くような競争状態にあろうとも、商社内に、温かな人間関係があれば、そこに勤める人間の気持ちを柔らかなものに変えられるからである。その証拠は『ドンビー』の前に発表された「クリスマス・キャロル」(*A Christmas Carol*, 1843) の中に求めることができる。スクルージ (Ebenezer Scrooge) は過去のクリスマスの幽霊に向かい、雇い主には奉公人を幸福にも不幸にもできる力があると言い、青年時代に勤めた商店の主人フェズィウィッグ氏 (Mr. Fezziwig) の奉公人たちへのねぎらいに心から感謝しているのである (*Christmas Books*, 33)。功利主義の世の中であっても、雇い主の配慮一つで、使用人は救われるのだ。カーカーは、危険な性質を秘めていようとも、それを抑え、成功を求めて努力してきたという事実がある。ドンビー氏が従業員たちの顔色を読む人間であれば、カーカーの最終的な暴発が防がれた可能性は高い。

支配人カーカーが悪党として最期を迎えるがゆえに、上記の点については、別の証拠も必要であろう。彼の兄ジョンも若かった頃に、商会に

対して盗みを働いたことがある。それはドンビー氏が出社しはじめた頃の事件で、先代である彼の父親が社長として健在であった頃の話である。ジョンは社長室に呼ばれたが、その罪を減じられ、以来、昇進はできなかったものの、商社に勤めることを許された。「社は私にとっても良くしてくれた。」(180)と言い、彼は先代社長とその息子に感謝し、以後、悔い改めたのである。妹ハリエット (Harriet Carker) の献身もあるが、寛大な沙汰のために、ジョンは立ち直れたのである。同じ血が流れる弟にも、人情は通じるはずなのだ。

人間どうしの触れ合いや他者への関心が社会的転落の歯止めになる例として、もう一人ウォルター・ゲイ (Walter Gay) の場合を見ておきたい。この青年は初めて物語に登場するときは14歳である。船具商の叔父ギルズ (Solomon Gills) の尽力で、ウォルターはドンビー氏の商会で働くことになる。叔父思いで、船乗りたちの冒険物語が大好きで、快活なこの青年は、読者なら誰しも好感を抱きたくなる人物である。彼は、迷子になった6歳のフロレンスを救ったことから、彼女の信頼を得、彼女を通じてポールからも関心を寄せられることになる。ウォルターが叔父やカトル船長 (Captain Edward Cuttle) と共に夢見るように、やがてはこの青年がフロレンスと結婚して出世するのではないかという期待を抱かせる。(実際に、彼は物語の終盤でフロレンスと結ばれることになる。)しかし、ディケンズは当初、読者の期待を裏切って、この青年が道を踏みはずしていく過程を描いた方がおもしろいのではないかと考えていた。そしてディケンズは、友人であり彼の伝記作者でもあるジョン・フォスター (John Forster, 1812-76) に手紙を書き送り、その案についての助言を求めていたのである。ディケンズは、ウォルターを通して「ふだんの生活の中で私たちが実によく知っている、ありふれた日常的な惨めな墮落」(Forster, II, 21) を描くことを考えていたのである。このことから、当時の青年たちが、いかに墮落と隣り合わせの人生を送っていた

かがわかる。この案は実行に移されなかったが、それでもなお、ディケンズはウォルターに道を誤る可能性が十分にあったことを、ジョン・カーカーの言葉を通して作品中で示唆しているのだ。次の引用は、ジョンがウォルターについて支配人カーカーに伝えたものである。

「私は震えながら恐れを抱きながら、そうすることが自分にとってのささやかな罰であるかのように、あの青年を見つめていた。私が最初に転んだ場所を彼が通り抜けたときまでな。その時、たとえ私が彼の父親であったとしても、あれ以上に心から神に感謝できなかっただろうと思う。」(179)

上の言葉から、ウォルターに若い頃の自分を重ね、肉親のような目で見つめ、さりげなく助言を与えてきたジョンの姿が見えてくる。ドンビー氏の父親の代にはまだ残っていたもの、すなわち *old fashion* として廃れつつある他者への心ある配慮が、ジョンの心に受け継がれ、今再びウォルターを守ることになるのである。

4

ジョンの心に刻まれている方の *old fashion* は、当然、ドンビー氏にとってはネガティブな意味を持つわけだが、それは彼の場合だけに限ったことではない。その事実を、支配人カーカーがイーディスに述べた言葉の中に見ることができる。

「……利益と便宜を求めるために、私たちの多くは普通、自分たちに感情がないということを公言せざるをえません。私たちの毎日にある

ものは、利益と便宜のためのパートナーシップ、利益と便宜のための結婚なのです。」(627)

カーカーの言葉の中にある「私たち」は、商人全般を指している。上の引用から次のように述べてよいだろう。作品発表当時、利益のためなら他者の内面を軽視あるいは無視するのが一般常識とみなされていたか、ディケンズ自身が社会にそのような風潮があることを確信していたかのいずれかである、と。また、フィリップ・コリンズが編集した『ディケンズ：クリティカル・ヘリテッジ』には、『エコノミスト』紙に掲載された1846年10月10日付けの署名のない記事が収められており、そこには、ロンドンがドンビー氏のように冷淡で横柄で堅苦しくて財布の中身を自慢するような男たちでいっぱいだという記述が含まれている(Collins, 215)。このことも、利益獲得を至上とする人々が多かったことを示している。

では、ドンビー氏のような商人は、本当に感情を無視できたのか。ドンビー氏は「冷たく固いプライドの鎧」(560)を身にまとう。「その鎧は懐柔と愛情と信頼を拒んでいることの証！ 外部からの優しい同情心、あらゆる信頼、あらゆる種類の感情に抗っている証拠だが、深い愛の刺し傷に対して、その鎧は、むきだしの胸が鋼に対してそうであるのと同じくらいに無防備である……。」(560-1) また商會が倒産した後のドンビー氏については、「近頃の苦しみの以前でさえ、強い精神的動揺と不安は彼にとってまったく珍しいものではなかった。」(842) という説明がなされる。最初の妻の臨終の際、妻と娘が交し合った情愛に自分が無関係であったことを忘れられないドンビー氏は、実は多大な努力とエネルギーを使って、自分の感情を押し殺しているにすぎないのである。ドンビー氏ほどではないにせよ、同時代の他の事業家たちも、胸の奥では、情愛を求めたい気持ちとそれを無視したいという気持ちとの間で、

葛藤を経験していたと推測される。

ドンビー氏にとって肯定的な意味を持つ方の *old fashion*、すなわち先代から受け継がれた事業家としての心得は、ディケンズによって完全に否定されているわけではない。仕事に厳しさが伴うのは、どの時代でも変わらない。仕事をするからには成功しなくてはならぬというもの、当然の考えだ。ディケンズ自身も、子ども時代に、父親が債務者監獄に收容されるという事態を招くほどの貧しさを経験している。そして彼は、子ども時代の辛さを糧にして刻苦精励し、小説家として成功したのである。もし成功のための確かな手引き書があったなら、彼だってそれを読みたかったに違いない。

しかし、ディケンズにとって、成功の手段も行き過ぎたものであってはならない。事業の成功のために心を砕いていようと、他者の気持ちに気づくゆとりは必要だ。つまり、二つの *old fashion* の融合が求められるのだ。

ディケンズは、象徴的にはあるが、上で触れた二つの *old fashion* の溶け合いを描いている。物語の終盤で、事業に失敗して何もかも失ったドンビー氏は、娘フロレンスの自分への変わらぬ愛を認め、自分自身の娘に対する愛にも気づく。その気づきの過程において、ドンビー氏が自分の二人の子どものことを考える場面がある。

夜が明けてドンビー氏は再び自室に閉じこもった。……毎晩、誰も人間がいなくなったことがわかってから、彼は出てきて、この荒らされた館の中を幽霊のごとくさまよった。幾朝も、夜が明け白む頃、まだ光を通しきらぬ窓の閉じられたブラインドの背後で、彼のやつれた顔が、うなだれながら、彼の二人の子どもの喪失に思いを巡らせていた。もはや一人子ではななかったのである。彼は心の中で二人の子どもを一つに結び合わせてしまい、二度と二つにならなかった。(842)

ドンビー氏は二人の子どもの姿を一つに重ねて見られるようになっていく。かつて、彼は、息子が死んだとき、墓碑に「愛する一人子 (beloved and only child)」(241) という言葉を刻むよう業者に命じたことがある。その業者から指摘されて、ドンビー氏は間違いを認め、子ども (child) の部分を息子 (son) に訂正したが、この事実は、彼が娘を無用の存在と信じたがっていたことを示している。ポールはドンビー氏にとって商社の一部分であり、事業の継続と発展のシンボルである。一方、フロレンスは何が起ころうとも父親を愛し続ける娘であり、情愛のシンボルである。ドンビー氏にとって、二人の子どもが一つに結びついたことは、事業への関心と人間への情愛が融合して切り離せなくなったことを意味しているのである。相容れないように思えた2種類の old fashion は、実は一つになるべきものだったのである。そして、ドンビー氏はその融合を果たしたのである。

ただし、これは商人ドンビー氏にとっての幸福な結末とはならない。彼は事業の失敗により、すべてを失い、「打ち砕かれた男」(815) にされる。さらに、彼は重い病を経て、アンガス・ウィルソンの言葉を借りるなら「ほとんど第二の子ども時代へ」と導かれる (Wilson, 166)。最終章でフロレンスの召使いであったスーザン・ニッパー (Susan Nipper) が予想するように、ドンビー氏が義理の息子となったウォルターが事業を発展させていく過程を見守るということはあるかもしれない。しかし、ドンビー氏が再び事業に関与する可能性はないであろう。彼は人間としての再生を始めるが、彼の事業家としての経歴は終わっているのである。

彼は、かつてイーディスとの新婚旅行から自宅に戻った晩に、椅子に腰掛けて眠ったふりをしながら、近くに座って編み物をしている娘を見て、無意識のうちに、次のような娘の無言の声を聞いていた。「……おお、お父さん、私の方を向いてください、そして私の愛の中に安息の場所を見出してください、手遅れになる前に……」(503)。残念ながら、彼は

手遅れになったのである。

ディケンズによってドンビー氏に罰が与えられた形である。このことは、金儲けに傾倒し、子どもを含む他者の心に関心を寄せることを忘れた同時代の事業家たちに対し、ディケンズが痛烈な非難を浴びせていることを意味している。

結 論

事業家に代々受け継がれるべきものは、統合的な意味での old fashion、すなわち、人間への温かな関心が確保された商習慣である。それが実践されるなら、事業家の家に誕生しようとも、跡継ぎたちは子どもらしく成長できる。ポールのように old-fashioned な少年たちが、血の通った人間関係を求めることに違和感を覚えなくて済む。彼らはやがて慈悲心も備えた商人に成長し、自分たちのもとで働く人々の心にも配慮できるようになる。厳しい競争の時代に入っても、前時代に存在した温かな人間性が抜け落ちることがあってはならないのである。

ポールは、人間に関心を寄せるのは当たり前、自分のような子どもが存在するのも自然、と言ってもらい、安堵したかったにちがいない。最後に、そのことを物語るポールとフロレンスの間で交わされた次の短いやりとりを引用して、本論の締めくくりとする。

「フロイ」、ポールは自分の手で彼女の黒髪が巻かれてできたリングを持ち上げながら言った、「教えておくれよ、ねえ、姉さん自身は僕が old-fashioned になったと思っているの？」

彼の姉は声を立てて笑い、彼を撫でて、こう答えた、「いいえ、ちつとも。」(197)

引用・参考文献

- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. New York: W. W. Norton & Company, 1973.
- Briggs, Asa. *Victorian People*. Chicago: U of Chicago P, 1955.
- Dickens, Charles. *The Oxford Illustrated Dickens: Christmas Books*. Oxford: Oxford UP, 1954.
- . *The Oxford Illustrated Dickens: Dombey and Son*. Oxford: Oxford UP, 1950.
- Philip Collins, ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens. 1872–4*. Ed. A. J. Hoppe. 2 vols. London: J. M. Dent & Sons, 1966.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. 1970. London: Panther Books, 1983.